

『歎異抄ってなんだろう』

高森 顕徹(監修) 高森 光晴・大見 滋紀(著)
(1万年堂出版)

「無人島に1冊の本を持っていくとしたら歎異抄だ」と言ったのは作家の司馬遼太郎。『歎異抄』は浄土真宗の開祖 親鸞聖人の弟子の唯円が書いたものと言われていています。10頁にも満たないこの本には仏教だけでなく、人が生きていく上で大切なことが凝縮して書かれています。博学の方でも読んで理解するのは難しい本です。この本ではその難解な『歎異抄』を難しい仏教用語を使わず、現代の表現に置き換えて書かれています。わかりやすく書かれてはいますが、もう少し簡単に読みたい、という方には『マンガ歎異抄をひらく』和田清人/脚本 1万年堂出版。もっと深く知りたい、という方には『歎異抄をひらく』高森顕徹/著 1万年堂出版、『私訳歎異抄』五木寛之/著 東京書籍などもお薦めします。

『地図をグルグル回しても全然わからない人の方向オンチ矯正読本』

北村 壮一郎/著(株式会社秀和システム)

日本で約4000万人。これは「方向オンチ」とその予備軍の数だそうです。実は私もそのひとり。ランチのお誘い。地図やアプリで、事前に駅からお店までの道順を確認します。よしっと、最寄りの出口を目指します。なのになかなか出口にも辿り着かない。何とかたどり着いた出口からも、どちらの方向へ進めば良いかわからなくなる。駅には約束の時間よりはるか前に着いているのに、遅刻すること常々。そんな方向オンチを克服すべく、本書を手にとってみました。まずは冒頭の「方向オンチ度チェッカー」に挑戦。案の定のスコアに納得しながら読み進みます。方向オンチが増えたのは、スマートフォンが普及して地図が各段に便利になったせい。脳を遊ばせているからとか。地図は見るものでなく読むものである。地図の中に感情を取り入れることで地図が読めるようになる。後半には「脳内マップ」の精度を上げて、市販の地図やアプリを翻訳するステップが説明されています。本書で方向オンチを改善して、約束の場所に時間通りに颯爽と現れるカッコイイ人になりましょう！

『おしゃべりな部屋』

川村 元気/著 近藤 麻理恵/著 (中央公論新社)

片づけコンサルタントでお馴染みの近藤麻理恵さんが実際に片づけてきた部屋にまつわる7つの物語。部屋にあるモノの声が聞こえる主人公、橙木ミコ。おしゃべりな小箱の相棒ボックスと一緒に、服を手放せない主婦、本を捨てられない新聞記者、なんでも溜め込んでしまう夫婦など、様々な依頼人に根気強く寄り添い、片づけのお手伝いをしていきます。片づけのノウハウ本はたくさんありますが、実話をもとにした小説なのでより臨場感があるように感じます。また、片づけは「捨てるモノ」を選ぶのではなく、ときめきを感じる「残すモノ」を選ぶという近藤麻理恵さんの片づけに対する姿勢や、具体的な片づけの方法が短い物語の中にしっかり描かれていて、とても参考になります。押し付けがましくなく、自分にもできるかもしれないと素直に感じられ、読んだ後、いえ、読んでいる途中から片づけがしたくてうずうずしてしまう本です。

『ナイアル』

藤井 カゼッタ/作・絵 シズカ/作・絵(フレーベル館)

先般、「自己肯定感」という言葉をよく耳にします。自分の存在価値を肯定できるかは、その人の生い立ちや環境、性格に由来されることが多いそうです。そんな人でもふとしたきっかけや出会い、もらった言葉によって人生の舵を大きく変えていくことができるのではないのでしょうか。まさしくそんな1冊を紹介します。主人公・ライネは「ナイ」ばかりで失意の中、かいだんの先でランプウと出会います。ランプウと出会ったことでライネの世界は「ナイ」から「アル」へ。その色調の変化はこの本の最大の魅せ場となっています。子どもだけでなく、最近なんだか上手くいかないな……と思っているあなたへ、自分のいい所が見つからないあなたへ、「自己肯定感」の低いあなたへ、いい出会いが待っていますよ。

『エリック』

ショーン・タン/著 岸本 佐知子/訳 (河出書房新社)

以前、北九州市立美術館で開催された「ショーン・タンの世界展」で、1枚の絵に釘付けになりました。それが、ピーナッツとクルミの鞆を携えてホームステイにやってきた、交換留学生のエリックです。本当の名前は難しく誰もちゃんと発音できないし、勉強するのも眠るのも、もっぱら台所の戸棚のなか。そんな不思議でちょっぴり奇妙な彼のことを、母さんは「きっとお国柄ね」とさらっと受け流します。控えめだけど勉強家で好奇心旺盛なエリックを楽しませようと、家族で色々もてなしますが、彼が興味を持つのは地面に落ちているちっちゃなものばかりなのです。すぐそばにあるのに、つい見過ごしてしまう存在があることを、エリックは私たちにそっと教えてくれます。優しさが心に染みるラストがとても素敵なのこの絵本は、『遠い町から来た話』に収録された話のもとになっています。

『親切なおばけ』

若竹 七海/作 杉田 弘呂美/絵(光文社)

推理作家というイメージが強い作者が、児童書を出版したということで気になって読んでみた1冊です。主人公のノノコちゃんの家は近所では「おばけやしき」とよばれるほど古く、かしいでいるため丸いものは廊下の端に転がってしまうほど。そして風が吹くと、家族みんなで柱にしがみつかななくてはならないのです。ノノコちゃんのおじいさんがなくなり、家でお葬式がはじまるのですが、ノノコちゃんが良かれと思ってやったことが何度も裏目にでてしまいます。厳粛な場面に起こる出来事はまるでお笑いのコントのよう。絵からもお話しの楽しさが伝わってきます。お気に入り、おばあさんの口から入れ歯が飛び出して菊の花にかぶりついた絵。よく面白動画などで入れ歯が飛び出す光景をみかけますが、こちらにもその場面が。どうしてこうなったのか気になる方は、ぜひ手に取ってご覧ください。

『なぜ、日本の職場は世界一ギスギスしているのか』

沢渡 あまね/著(SBクリエイティブ株式会社)

日本の職場は「世界一」ギスギスしていると、国際調査で明らかになったそうです。本書では「環境」「スキル・メンタリティ」「制度」によるギスギスと三つに分類し豊富な実例とデータを基にギスギスの原因を掘り下げます。原因を可視化することにより、自分の職場でどう対処すべきかを考えられます。本書を読むとどこの職場も多少なりともギスギスしているのだとあきらめようかと思う反面、社内全体が考えて行動すればギスギスは無くなるのでは?とも思えてきます。日本人の人との関り方や上下関係など、世代間での感覚の違いがどんどん大きくなっています。社内全員で一読し、社内全体で働きやすい職場への変化を考えてはいかがでしょうか。

『流浪の月』

凧良 ゆう/著(東京創元社)

人は誰しも他人に言えない秘密や傷を抱えているものです。放課後の公園で降り始めた雨に濡れ帰ろうとしない9歳の少女、家内更紗は、彼女に傘を差し掛け声をかけた孤独な青年、文と出会います。後に誘拐事件の被害者と加害者とされた2人にしか見えない真実は、哀れみや嫌悪になり「事実」へと書き換えられていきました。

15年後、事件は再び注目され徐々に世間に明るみになっていきます。再会すべきではなかったかもしれない男女がもう一度出会ったとき、運命は周囲の人を巻き込みながら疾走を始めるのです。「事実」と真実が違っていても、お互いのことを分かり合える心の触れ合いがそれぞれの人生の光となっていくます。何も言わずとも分かり合える、新しい愛の形を感じられるのではないのでしょうか。

『僕が殺した人と僕を殺した人』

東山 彰良/著 (文藝春秋)

「平気でよその家にあがりこみ、食ったり飲んだりテレビを見たり」
「庭の月桂樹が夕日に赤く染まっていて」……1980年代の台湾を舞台にした話なのに読んでいてどこか懐かしさを感じてしまうのは、かつて日本にあったかも知れない風景だからだろうか。あるいは、幼少期を台湾と日本の両方で過ごした著者の記憶に因るものかもしれない。登場人物たちと同じように、賑やかな少年時代を送ったことだろう。ただし、本書は「賑やかな少年時代」だけでは終わらない。冒頭から11歳の少年が誘拐されかけるのだ。犯人は既に7人もの少年を手にかけて連続殺人犯だという。セピア色の懐かしい回想をくすんだ色調の殺伐とした現在が侵食していく様は、思い出が汚されていくようだ。2015年のアメリカ・デトロイトで邂逅を果たすかつての少年たちは、何を思うだろう。青春群像劇のようでもあり、ミステリーのようでもあり、ヒューマンドラマのようでもある本書を、ぜひ堪能してほしい。

『ダンナ様はFBI』

田中 ミエ/著(幻冬舎)

小説みたいな題名ですがノンフィクション。ドラマみたいな題名で実際にドラマ化している、そんな本です。国際結婚は色々価値観や文化の違いがあり大変なことが多いです。そんな国際結婚において、「FBI」という一般の方がまず接さないであろう職業の方との結婚は、まさに「事實は小説よりも奇なり」なことが沢山。

危機管理能力が非常に低い国民性である日本人の作者と、危機管理能力の塊であるダンナ様の価値観のすりあわせは、価値観が違いすぎてすり合うことが非常に難しくもあります。互いの認識に差がありすぎるのですが、結局はFBIのダンナ様による理論が論破。日本に居ながらにして、徐々にアメリカナイズされていく作者の姿は、きっと他人事だから面白いのでしょう。

『JK、インドで常識ぶっ壊される』

熊谷 はるか/著 (河出書房新社)

JK=女子高生、が父親の転勤に伴い家族でインドに引っ越して感じたカルチャーショックを若い感性で描いた内容だ。分類番号は紀行だがエッセイに近い印象を受ける。「第16回出版甲子園」で高校生として初のグランプリを受賞した。多くの人がインドと聞いて思い浮かべるのは食べ物や観光地である世界遺産であり、著者の冒頭の話もそういった内容である。しかし生活が根付くと時間と共にインドの文化に深く関わらざるを得なくなる。カースト制度があり労働人口のおよそ8割が非公式経済に従事しているともいわれるインド。その社会の中、女子高生の目を通して語られる生活は、読み手にも様々な気づきや感情をもたらしてくれる。著者が何を感じ考え得た数年間だったのか、なぜこの本を出版しようと思ったのか、あとがきまで存分に「学べる」価値がある1冊と言えるだろう。

『怪奇漢方桃印 いらんかね?退魔封虫散』

廣嶋 玲子/著(講談社)

ふしぎな駄菓子屋が舞台の超人気シリーズを手掛ける作者が紡ぐ、新たな物語。美しい鈴の音が聞こえたら、どこからともなく現れるピンクの髭を三つ編みに編んだ、麦わら帽子のおじいさん。その人こそ、困ったことや悩み事がある人の前にだけ現れる漢方屋さんの桃さんだ。遊び半分で儀式を行い、霊を呼び出してしまった女の子。「弟なんていない!」と、つい怒ってしまい妖精に弟を取り換えられてしまったお姉ちゃん。面白ければなんでもいいと、お墓で好き放題にふざける男の子。そんな小さな落とし穴に落ちて、取り返しのつかないピンチに陥った時に助けてくれるのが桃さんだ。「お薬を調合してあげるなのね」と木箱から取り出すのは、魅力的な漢方の数々。桃さんは絶体絶命の子どもたちをどうやって救うのか!? 風の吹くまま気の向くまま、桃さんは今日も鈴の音を響かせながら旅を続ける。

『コンビニ兄弟—テナダネス門司港 こがね村店』

町田 そのこ/著(新潮社)

舞台は北九州市の門司港。九州だけに展開するコンビニチェーン、テナダネスの門司港こがね村店は、上が高齢者向けのマンション、一階にはイー
トインスペースのあるコンビニ。

そのコンビニにはフェロモン垂れ流しのイケメン店長、志波三彦、通称ミ
ツがいる。時に、なんでも屋をされていて人探しが得意な弟、ツギと協力し
て会うべき人と人とを出会わせてくれる。そんなコンビニ兄弟が、個性
的な常連客などに関わり繰り広げていく物語6編を収録。ひとつひとつの話
が面白く、登場人物も魅力たっぷり。

それぞれのお話も少しずつ繋がっていて、読み進めていくことでわかる事
実も。最初から最後まで一気に引き込まれて読んでしまいます。幸せを見
つけられるコンビニ、読んだらきっと通いたくなります。

『全国もなかぼん』

オガワカオリ/著(書肆侃侃房)

北九州生まれの著者が日本各地で見つけたお菓子、もなかを実寸の写真付きで紹介しています。よくお土産でもらったり和菓子屋でみかけたりと小さい頃から目にしていた馴染みのある和菓子ですが、なかなか自分で買うことはありません。私自身、もなかの印象はやっぱり少し高いこと。そこに1個あるだけで品よく見えるのです。食べる時はもなかの形を目で楽しんだあと、たっぷりとあんこが入ったもなかを片手で持ち、こぼさないようにもう片方の手を添えてぱくり。いつもよりゆっくりと味わって上品に食べているような気がします。本の中に、もなか種屋さんの工場見学も掲載されています。もなか種というのはもなかの皮のことで、それだけをつくっている工場があることに読んでびっくりしました。その工場には金型が300種類程あり、ここで焼かれたもなか種が日本各地に配送されているそうです。もなかが食べたくなる、そしてもなかのことが詳しくなる1冊です。

『ルラルさんのだいくしごと』

いとう ひろし/作(ポプラ社)

この絵本の主人公は、ルラルという名前のおじさんです。ルラルさんは大工仕事が得意で、ちょっとした修理は自分でします。ある日、雨漏りの修理をしようと屋根に上ったところ、いつの間にかはしごが倒れて屋根から下りられなくなってしまいました。そこへ、庭にいた動物たちが助けに駆けつけますが……

私のルラルさんに対する第一印象は「くせのありそうなチョビ髭おじさん」で、あまり好感が持てませんでした。なぜか子どもたちには大人気！小学生に読み聞かせした時、ルラルさんが登場しただけで爆笑が起こったことは忘れられません。人気シリーズの8作目である本作は、のんびりゆったりした気持ちになれるので、コロナ禍の今、大人の方にもおすすめしたいお話です。シンプルでポップな色合いのイラストとともに、ルラルさんのユーモアな世界観を存分にお楽しみください。

『教養としての「国名の正体」』

藤井 青銅/著(柏書房)

「日本は“ニホン、？” “ニッポン、？” 「アメリカ合衆国はなぜ〈合州国〉と書かないのか？」 「赤道ギニアに〈赤道〉は通っていない?!」

「〈サモア独立国〉 〈ボリビア多民族国〉 って一体どういうこと？」

「オーストリアとオーストラリアは何で名前が似てるの？」

人の名前と同じように、国の名前にも様々なドラマがあります。私たちが何の気なしに見聞きしている「国名」には、それぞれの国家の歴史・地理・理念・風俗といった多種多様な「大人の事情と思惑」が込められているのです。本書にまとめられた、日本をはじめ世界196か国、5地域の「国の名前」。それに秘められた深い事情、歴史や理念の積み重なりといった由来を知れば、歴史や地理の視点だけでは決して見えてこない、まったく新しい世界の姿が見えてくるかも？

名前だけは知っている海外の国々、そして日本への理解を深めるきっかけになる1冊です。

『お探し物は図書室まで』

青山 美智子/著 (ポプラ社)

「何をお探し?」

町の小さな図書室に、仕事や人生に悩む人々に、生きるヒントを教えてくれる司書がいました。レファレンス(調べ物)担当の彼女は、不愛想だけど聞き上手。相談者は誰にも言えなかった本音や願望を話してしまいます。話を聞いた司書は、なぜか思いもよらない本も薦めてきます。しかも、その本の付録にお手製の小さな羊毛フェルト付きで……。こんな司書、実際にいたら通ってみたくなること間違いなし。その言葉遣いや素っ気なさは、同業者として少し気になるけれど、彼女は彼女にしかできない仕事をしているから、誰も文句は言いません。彼女のレファレンスは調べ物のお手伝いだけでなく、人生の答えを見つけるお手伝いをしているのですから。この本を読むと、人生の答えは実は本に溢れている、と思えてきます。だから、もっと本を読もう、色々な本に出会おう、とも。ただ、それに気づくかどうかは、少しのきっかけと自分次第なのかもしれません。

『春、戻る』

瀬尾 まいこ/著(集英社)

和菓子職人の山田さんとの結婚を間近に控えるさくらの前に、自分はさくらのお兄さんなんだと名乗る男の子が突然現れます。どう考えても自分より年下にしか見えないお兄さんの存在に戸惑うさくら。迷惑そうなさくらの心情などお構いなしに、行く先々に現れては色々と世話を焼いていくお兄さん。最初は不審にしか思わなかったお兄さんの存在が、いつしか兄と妹としてさくらの日常に溶け込んでいきます。お兄さんの目的は何なのか。何故、そんなにさくらのことに詳しいのか。人と人との繋がり、過去との向き合いなど、ちょっと重いテーマでも瀬尾さんの文章で語られるとどこか面白く優しく胸に落ちてきます。

『長くつしたのピッピ』

アストリッド・リンドグレン/著 木村 由利子/訳(ポプラ社)

おてんばなピッピに誰もが元気をもらえる世界名作です。ピッピは個性的で元気な女の子で、私の中の『こんな友達いたらいいなランキング』堂々の1位の主人公です。タイトル通り、『長くつした』をはき、赤毛のはね上がった三つ編みの髪に、肩にオナガザルをのせています。おてんばエピソードは、馬を持ち上げたり、警察と鬼ごっこをしたり、サーカスに飛び入り参加したり……とピッピの伝説は数え切れません。大人から見れば「お行儀が悪い」「やかましい」と思う自由奔放な姿も、子どもの視点では「あんなふうになりたい!」という理想の姿です。私自身も「ピッピみたいになりたい」と真似をして三つ編みをして登校したこともありました。子どもの憧れがギュッと詰まった主人公であるからこそ、何十年経っても変わらず愛される海外文学なのではないでしょうか。

『ぼくの「自学ノート」』

梅田 明日佳/著(小学館)

NHKスペシャルで取り上げられ、何度も再放送されていたので、ご存じの方も多いかもしれない。

梅田 明日佳くんは北九州市生まれ。小学3年生の時に始めた彼の自学ノートにはありとあらゆる世界が詰まっている。小倉駅前の銅像の「ばち」が消えたことから、憲法九条に世界情勢。大人が読んでもドキッとさせられる視点で捉えられている。疑問だけに終わらず、一歩進んで知ろうという姿勢を持つと、これだけ未来は広がるのだと教えられる。

『江戸絵皿絵解き事典 絵手本でわかる皿絵の世界』

河村 通夫/著(講談社)

金の縁取りに赤、緑、青、黄色、茶色……と様々な色を使って描かれた鮮やかな江戸時代の絵皿が表紙を飾っています。けれど、その絵柄は浜辺で大きな貝に足を挟まれた人を助けようと、仲間たちが手を引っ張っているというちょっと不思議なもので……

陶磁器について解説した本はたくさんありますが、本書は江戸時代から明治時代にかけて作られた絵皿の「絵の意味」を解説した日本初の絵解き事典です。絵皿に描かれた故事、動物や植物の意味だけでなく、描かれた絵の手本になった江戸時代の書物の解説もあり、絵皿を通じて昔の人々の暮らしが垣間見えてくる1冊です。

『文様えほん』

谷山 彩子/著(あすなる書房)

「文様」とは、着るものや日用品、建物などの飾りつけのために描かれた絵や形のことです。まっすぐに成長する植物の「麻」にあやかり産着などにも使われる「麻の葉つなぎ」、長寿・めでたさを象徴する亀の甲羅を模した「亀甲つなぎ」など、その形によって様々な名前と意味があります。

古くから受け継がれてきた美しい文様の数々は日本の着物や伝統芸能、季節の行事などを通して現代にも息づいており、近年では「市松模様」が東京オリンピックのエンブレムに用いられたことでも話題になりました。この本ではそうした着物の柄や家紋、外国の模様といった300種の文様の由来や仕組みなどを、可愛らしいイラストで分かりやすく解説しています。子どもも大人も楽しめる、芸術的な日本の伝統文様を学ぶ入門編にピッタリの1冊です。

『ザ・ロイヤルファミリー』

早見 和真/著(新潮社)

タイトルを見て、日本の皇室の話かと思ったら全く違った。馬と馬主と競馬と、その周囲の人たちの物語である。競馬に関する知識がほとんどない私は、業界事情に驚かされた。馬主になるには総額7000万以上の資産と1700万以上の年間所得が2年以上なければならない、購入から育成まで億単位の費用をかけても1円も稼げずに終わる馬もいる、引退後に種牡馬になれるのは年間でも10頭ほど……馬主になることこそギャンブルのようなものであるらしい。だが本書は、競馬で身を亡ぼす馬主とその馬の悲劇、というわけではない。登場する馬主は「人生をやり直すとして、もう一度馬主をやるか」と問われ「やらない」と答えるのだ。「うしろめたい」「家族や関係者に対して引け目を感じる」と言う。だからこそ馬を大切にし、レースに勝たせ引退後の余生をより良いものにするために、金と時間と労力を掛けるのだ。そこにあるのは愛情でしかないだろう。馬と人がつくる「家族」の有り様を、ぜひ味わってほしい。

『チポリーノの冒険』

ジャンニ・ロダーリ/作 関口 英子/訳(岩波書店)

私には、子どもの頃に図書館で見かけてから、気になるのに何故か一度も手に取ったことがない本がありました。それが『チポリーノの冒険』です。チポリーノという言葉の響きが耳に残り、毎回口ずさんでしまうにもかかわらず読まなかった本を、ついに30年越しで開きました。そして、今まで読まなかったことを後悔しました。

主人公のチポリーノは賢く勇気のある玉ねぎの坊やです。両親や兄弟と、貧しくも正直に暮らしていた一家は、ある日大災難に見舞われます。国を治めているレモン大公が、無実の罪でチポローネ父さんを牢屋に入れたのです。父さんを救い出すために旅に出たチポリーノは、仲間と力を合わせ悪者に立ち向かいます。イタリアを代表する児童文学作家が紡ぐ、不公平な社会への皮肉とともに明るい笑いが散りばめられた痛快な冒険小説です。歌や紙芝居でも親しまれています。この本が気になった方には、ぜひ読むことをおすすめします。

『ペナンブラ氏の24時間書店』

ロビン・スローン/著 島村 浩子/訳(東京創元社)

失業中の青年クレイが働くことになった「ミスター・ペナンブラの二十四時間書店」は、その名の通り二十四時間開いている書店だ。お客さんがほとんど来ない深夜も営業している。昼間もほとんどお客さんは来ない。それもその筈、この書店には、一般に流通している「普通の本」は少ししか置いていない。梯子付きの見上げるような高いたかい本棚には、暗号で書かれた本がぎっしり詰まっているのだ。主人公のクレイは、友人たちの力を借りて暗号に挑む。

それは、500年越しの暗号を解き明かす旅の始まりだった……本を読んだ後、自分だけの暗号を作ってみてほしい。もしかしたらそれが、誰かにとっての旅の始まりになるかもしれない。

『エプロンメモ』

大橋 芳子/編著(暮らしの手帖社)

『エプロンメモ』は、雑誌『暮らしの手帖』に昭和の時代掲載された記事の中から選んで、編集された本です。毎日の暮らしの小さなヒントが、簡潔な文章で、季節ごとの6つの章にまとめられています。冬の章の『コーヒーの工夫』。せっかく挽いたコーヒー豆を、二人分の量を計って淹れだしたときに、急に「もう一人分増やして」と言われて困ったら。解決策は、お湯の量だけ三人分に増やして、インスタントコーヒーを少しずつ足しましょうとあります。このような素朴なアイデアが大真面目に書かれていて、思わず吹き出してしまうものもあります。今の時代にそぐわないものもありますが、なるほどと感心したり、昭和生まれの方には懐かしく、若い方には新鮮な発見が感じられたりすると思います。添えられた小さなイラストも愛らしく、とても楽しめる1冊です。家事の合間や午後のティータイムに、パラパラと拾い読みされてはいかがでしょうか？

『劇場建築とイス 客席から見た小宇宙 1911-2018』

コトブキシーティング・アーカイブ/企画・監修(ブックエンド)

最後に博多座に行ったのは、2020年2月。観劇が数少ない趣味の一つである私にとって、このコロナ禍で思うように舞台を観に行けないというのは、かなりのストレスだ。そんな中で出会ったのが、本書である。本書は、日本で初めて公共施設家具の製作を手がけた企業の写真アーカイブから生まれた劇場の写真集だ。1911年竣工の帝国劇場から2018年竣工の札幌文化芸術劇場hitaruまで、約60の劇場・ホールの写真が竣工順に収録され、日本の劇場建築の歴史的変遷も俯瞰できる。本を開けば、全国各地の劇場の写真が目飛び込んでくる。眺めているだけでワクワクする。劇場に足を踏み入れた時の高揚感を、本書は思い出させてくれた。私のストレスも心なしか軽減した。近頃では、舞台もオンライン配信されるようになったが、やっぱり劇場に足を運んで舞台を観たい。そう思わせてくれる1冊だ。

『妖怪一家九十九さん』

富安 陽子/作(理論社)

幼少期、妖怪やお化けが大好きでした。ゲゲゲの鬼太郎は毎週欠かさず見ていましたし『妖怪大図鑑』を何度、読んだかわかりません。大人になりすっかり妖怪とは疎遠になっていた私が、ふと、最近の妖怪はどんな描かれ方をしているのかとこの本を読んでみて驚きました。妖怪が市役所でたらい回しされていたのです。しかも8回！自分達の住む場所に団地が立つことを知って、市役所に相談しにいっただけなのに。行く先々で丁寧に最初から説明する紳士な妖怪に対してなんてことだと憤慨しながら読み進めると市役所の職員から一つの提案が出てきました。それは、建設された団地に住まないかというものです。良さそうな案にも思えますが、そう簡単にことが進むのか……そう考えたそのあなた、大正解です。どんなトラブルがおこるのか、それは、是非、あなたの目で確かめていただきたいです。この本は、児童室に所蔵しています。ご来館、ご予約、お待ちしております。

『惜櫟荘だより』

佐伯 泰英/著(岩波書店)

新築家屋は三十坪までという制限があった戦時中、熱海に一軒の別荘が建てられました。別荘の設計にあたっては、「初島を正面に、どの部屋からも海が見えるように」など、家主である岩波茂雄よりこだわりの七つの注文が出され、それに答えたのが建築家吉田五十八です。軍事物資が優先され物が手に入りにくい当時、岩波茂雄は手を尽くして最高級の石材・木材を入手し、吉田五十八が京都から連れてきた職人たちによって建てられたのが、この惜櫟荘(せきれきそう)です。惜櫟荘が建って七十年。文豪を始め多くの著名人が訪れ愛した惜櫟荘とその景観を守るため、番人となった著者。長い時を重ねた名建築が、著者と惜櫟荘に縁のある人々の手によって解体修復工事が行われ、見事に蘇っていく様子がこの1冊に綴られています。

『めんどうなことしないうまさ極みレシピ 激烈美味しいストレスなし103品』

ジョーさん。著/(KADOKAWA)

Twitterで投稿するレシピが大人気のジョーさん。の2冊目のレシピ本です。「台所に立つのが楽しくなるように」をモットーに、幅広いレシピを考案しています。

今日は疲れたから作りたくない……でもお弁当は買いたくない、外食も嫌。そんな日でもジョーさん。のレシピならばあっという間に、簡単に美味しいご飯が作れちゃいます。レンジや市販の調味料を上手に使って、めんどうな下ごしらえもなし、お野菜たっぷり冷蔵庫の余り物も有効活用。リピートしたくなるレシピが満載です。写真を使って作り方をわかりやすく説明していますので、お料理初心者の方や男性にもお勧めのレシピ本です。

『ウラコクラ Ura-Kokura』

加瀬 息吹/著(みらいパブリッシング)

著者が子どもの頃から慣れ親しんできたホームタウン、北九州市小倉の裏通りで出会った風景や人々を記録した地元愛あふれる写真集。色んな意味で観光名所とは言えないけれど、ちょっと教えたくなる地元ならではの風景が詰まっています。ど派手な衣装で成人式に参加する地元の若者たち、気泡だらけの紫外線防止フィルムを通して見た工場、九州唯一のストリップ劇場「A級小倉劇場」や、その劇場前を歩いて学校に行く小学生などの数多くの写真にショートエッセーが加えられています。その時にしか撮れないかもしれないという危うさが見え隠れしている写真もあり、ほろ苦い感覚を覚えます。

また、地元に住んでいる私たちは普段目にはしているのに、何気なく通り過ぎてしまった、知っているけど知らない風景が、著者の写真によって掘り起こされ、それぞれドラマを与えてくれるように感じます。写真のその奥ももっと深く知りたくなる……、味わい深い写真集です。

『パパとママのつかいかた』

ピーター・ベントリー/ぶん サラ・オギルヴィー/え
福本 友美子/やく (BL出版)

『Meet the parents』が原書のタイトルです。直訳すると『両親に会う』『両親と接触する』ですね。少し見方を変えることで家族の新しい一面との『出会い』が毎日あったら楽しいだろうな、子どもへのこんな『接し方』素敵だなと思いながら読みました。お馬さんになって一緒に遊んでくれたり、寝る前に本を読んでくれたり……怒ってばかりのお父さんやお母さんも使い方次第だ、とユーモアに満ちた子ども目線で展開するストーリーはクスッと笑えて癒されます。読後、お子さんなら家族の愛情を改めて実感してもっと家族が好きになるかもしれません。親御さんならイライラしたり疲れたりしていても、「子どものいたずらや失敗も、笑い飛ばして日々を楽しもう」とリラックスできるかもしれません。お子さんへの読み聞かせはもちろん、子育て奮闘中のお父さんお母さんにもおすすめです。

『臨床の砦』

夏川 草介/著(小学館)

不撓不屈(ふとうふくつ)——「困難にあってもひるまず、くじけないこと」と広辞苑にあった。新型コロナウイルスという奇禍のさ中、全世界に求められているのは正にそういった精神だろう。そしてその奇禍の最前線で戦っているのが、この本に登場するような医療従事者たちだ。ただ、登場人物たちの闘いは不撓不屈だけでは言い表せない。暗中模索、四面楚歌、孤立無援……………それでも闘い続けている。小説として書かれているが、現役内科医である著者の実体験をもとにしているので、まるでドキュメンタリー番組を見ているようだ。この本をとにかくできるだけ多くの人に読んでもらいたい。今この時に各地の病院で同じことが起こっているのだ。彼らの努力や苦しみが報われ、雲外蒼天となるためにも私たちこそ闘わなくてはならない。

『貸出禁止の本をすくえ!』

アラン・グラッツ 作/ ないとう ふみこ/訳(ほるぷ出版)

「コミュ障」という言葉が使われるくらい現代人は、自分のコミュニケーション能力に悩む人が多い。かく言う私も上手くはないので、この本の主人公のエイミーの気持ちがよくわかる。エイミーは、大好きな本『クロードアの秘密』が学校図書館で「貸出禁止」となること知る。憤慨していると会議に出席して反論して欲しいと言われるが、会議で一言も発言することができない。彼女は、心の中では、反論できるがそれを言葉にのせることができないのだ。それでも、大好きな本のためにと行動するが上手くいかない。それどころか貸出禁止本が次々と決まっていく。本達は、どうなってしまうのか。本書で貸出禁止本となる作品たちは、過去、アメリカで実際に異議申し立てや貸出禁止となった本であるという。あの本が?と驚く人も多いのではないだろうか。彼女が守り抜いた『クロードアの秘密』を読んでみたくなる。

『こども六法』

山崎 聡一郎/著(弘文堂)

タイトルが難しそうですが表紙が可愛らしい動物のカラーの本で手に取りやすかったです。作者は子どもたちにおすすめの読み方は、まず10分程度パラパラと読んでほしいと書いてありました。ページごとに「ケガをさせなくても暴行になるよ」「子どもだからといって謝るだけでは許されない」などリアルな内容をコミカルな動物たちの挿絵でわかりやすく読みやすくしてあります。大人だけでなく読み物に慣れていない子どもでも興味のあるところから読むことができると思います。なにより著者自身の経験から子どもの頃悩んでいた当時の自分に届けてやりたい本を作りたかった、という思いが詰まった作品です。この本に出会い一人で悩んでいる子どもたちが、助けてくれる大人も法律も権利もあなたにはあるということを知ってほしいと思います。法律を少し知れば心強くなれる、もっと知りたい勉強したい。そんな気持ちになってくる作品です。

『フルーツふれんずぶどうくん』

村上 しいこ/作(あかね書房)

出版社の紹介には「もぎたてフレッシュな物語!!」とあり、さらにはタイトルからして、かわいらしいフルーツたちのほのぼのの仲良し物語だと思ったら大間違いだった。シリーズ1巻の主人公、スイカちゃんは大きな顔を悩んでいて、小顔のイチゴちゃんに憧れている。学級委員のブドウくんはクラスのみんなを注意しがちなことを気にしている。フルーツだって悩むのだ。みんなを注意しがちな理由が分かった後の展開も予想外だった。担任、ほしがき先生の話し方も気になる。スターくんだけ顔が断面なことも気になる。63ページの中に気になることがたくさんある。妙にイケメンなイガグリくんの巻が待ち遠しい。読後には自分がフルーツふれんずだったら……と想像しても楽しめそうだ。

『13歳のきみと、戦国時代の「戦」の話をしよう』

房野 史典/著(幻冬舎)

13歳ではないですが読みました。

著者はお笑いコンビ「ブロードキャスト!!」のツッコミ担当、房野史典。彼らのネタは見たことがないのですが、本書は大変面白かったです。桶狭間の戦いや関ヶ原の戦いといった有名な戦を、軽快なノリでわかりやすく説明しているので、「歴史の本を読むなんて苦痛」という方でも楽しめます。「歴史を知って何の役に立つのか」と考える方もいるかもしれませんが。確かに歴史を知らなくても、今を生きていく分には困りません。しかし歴史には、過去の成功例や失敗例が刻まれています。歴史を知り、そこから得た教訓は、私たちがよりよく生きるための手助けとなるでしょう。13歳でない方々にも、お薦めの1冊です。

『教室に並んだ背表紙』

相沢 沙呼/著(集英社)

この本は、中学校の図書室を舞台に、ままならない友人関係や、未来への漠然とした不安に揺れる思春期の心模様を丁寧に描いた全6編の連作短編集だ。図書館が好きだった学生の頃を思い出し、また当時の思春期だった自分に思いを馳せながら読む時間は、楽しいと同時に、少しだけ苦い記憶も呼び覚ましてくれる。中学生や高校生のヤングアダルト世代だけではなく、その世代に向き合う大人にもぜひ読んでほしい。大人になると、しだいに子どもの頃の悩みや当時の気持ちを忘れてしまう人も多いかもしれない。けれど、子どもの頃の悲しかったことや、悩んだ気持ちを忘れずにいることで、子どもたちとしっかり向き合うことができるのではないだろうか。

読み終わったあとには、タイトルの「教室に並んだ背表紙」の意味にきっと気づけるはずだ。

『土葬の村』

高橋 繁行/著(講談社)

日本で土葬がいまだに行われている事はご存じだろうか。現在日本の火葬率は99.8%に達しており、本書は今も残るその数少ない土葬の記録である。

一般的に行われている火葬にもしきたりやルールがあるように、勿論土葬にも土葬のやり方というものが存在する。葬儀社が行う火葬と比べると、多くの手間や時間、人手がかかるということも土葬が減ってきている理由にあげられる。ムダを省いて効率化を求める風潮があるが、ムダと思われていたものにも、実は色々な意味がなされていることもある。日本では急速に消えつつある文化というものが存在するが、土葬も間違いなくその一つといえるであろう。しかし一度消えてしまった文化を復活させるのは大変難しいことを忘れてはならないのである。

『昔話法廷』

NHK Eテレ「昔話法廷」制作班/編(金の星社)

裁判員制度が始まって10年以上経ちました。しかし、未だに実際に自分ならどう判断するかを考えたことがない人が多いのではないのでしょうか？私もそんな1人です。この本は、ざっくり言うと昔話の罪を現代の法で裁くといった内容です。殺人罪から若干こじつけのような罪まで、昔話のメインキャラたちが様々な罪で裁判にかけられます。それを裁く裁判員たち。選ばれた裁判員たちは自分たちの置かれた環境などによって、加害者側の心情の変化、被害者側の……と様々な意見を出し合います。読んだ人が自分自身も裁判員となって裁判を行っているように感じられる作品です。

昔話という誰もが知っている事件?で、子どもから大人まで幅広く考えさせられます。ご家族で、友人と、一緒に開廷してみてはいかがでしょう？

『日本アイスクロニクル』

アイスマン福留/著(辰巳出版株式会社)

アイス評論家であり、日本アイスマニア協会代表理事を務める著者は、年間に1000種類以上のアイスを食べ、全てのパッケージを保存・収集している言わばアイスの専門家だ。そんな著者のアイスへの「熱い愛情」が形になった今回の著書は、昭和を中心に様々なアイスのパッケージが所せましと掲載されている。ただパッケージを並べるだけではなく、1969年から5年ごとに分類し、それぞれの商品の味や大きさ等の細かい説明、その年代のアイス事情や当時流行していたものまで克明に記されている。さらに、アイス好きを唸らせる当時の広告や、販促キャンペーンのポスター、歴代のアイス自販機まで掲載しているので、満足しないワケがない。子どもの頃、悩みに悩んで選んだアイス。学生の頃、友人と分けながら食べたアイス。仕事終わりに、少し奮発した自分へのご褒美アイス。あの頃の思い出を、アイスと一緒に振り返ってみてはどうだろうか。

『発注いただきました!』

朝井 リョウ/著(集英社)

「桐島、部活やめるってよ」で新人賞を受賞し瑞々しく文壇に登場。その後も決まった型に捕らわれない作品を世に出し続ける作家、朝井リョウの遊び心のある1冊。内容は小説と書評と随筆の詰め合わせである。題名通り各企業などからの発注で生まれた短編小説と著者本人による書評。これが面白い。

短編小説は文字数や使用する単語や作風の印象といった、制限のある依頼内容に沿って作られるのでまるで習作のよう。そこに作者本人の駄目出しと言いつの書評という名の感想が添えられており、作家業の苦楽と朝井リョウの人となりが良い塩梅に混ざった微笑ましく楽しい内容となっている。ちなみにこの感想文にも外来語を使用しないという縛りを設けてみた。なかなか苦労した。

『エブリデイ』

デイヴィッド・レヴィサン/作 三辺 律子/訳(小峰書店)

「一日だけでいいから他の人間になってみる」ことが実際に叶うとしたら、あなたは試してみるだろうか。「一日だけ」というところもポイントだ。いつもと違う一日をちょっとした冒険気分で味わって、翌日には通常運転、おとといからの日常の続きが始まる。

だが、それが毎日だったらどうだろう。この主人公がまさにそれだ。違う人間に一日だけ成り代わるという毎日が、生まれて16年、ずっと続いているという。翌日の宿主のために逸脱したことはしないと決めていた主人公だが、ある少女との出会いが変化をもたらす……「一日の人生」を生きるしかない主人公と、「人生の一日」を奪われる宿主、そしてその周囲の人々。主人公の「成り代わり」は、徐々に影響の範囲を広げていく。

実は三部作の一部のみ邦訳がされている本書だ。残り二部の翻訳が待ち遠しい。

『マジック大図鑑』

DK社/編著(新星出版社)

舞台に立つ緊張感と失敗した時の冷や汗、成功した時の高揚感—私は一度だけ十数人の前でマジックを披露したことがあります。そして、マジックは自分でやるものではなく見るものと堅く心に誓ったのですが、一生の思い出になった瞬間でもありました。当時この本があったらと思える1冊に出会いました。コインやランプを使ったマジックや、ステージマジックなど、20以上のマジックの手順を写真で丁寧に解説した図鑑です。児童向けではありますが、マジックの歴史やマジシャンの紹介、マジックの心構えなども載っていて、トリック好きの心をくすぐる内容となっています。世界的大手DK社の図鑑は、眺めているだけでも楽しいですよ。

スマホで簡単に動画を見られる今の時代、大きくて重い本は敬遠されがちですが、ぜひ一度この大きな本を手にとって隅々まで読んでみてください。そうすれば、不思議で魅力的なマジックの謎に近づけるかもしれません。

『世界でいちばん素敵なお城の教室』

加藤 理文/著(三オブックス)

昨今人気を集めている城めぐり。「御朱印」ならぬ「御城印」なんていうものも登場し、城めぐりはひとつのブームとなっています。もし城めぐりをするなら、事前にお城について知っておくとより一層楽しめますよね。

「でも解説書は難しそう……」という方には、本書をおすすめします。

「城の壁にたくさん空いている三角や丸の穴はなに?」や「日本でいちばん強いお城はどこ?」といった素朴な疑問を通して、日本のお城について解説しています。Q&A形式なので読みやすく、入門書にピッタリな1冊です。また美しい写真が豊富で、眺めているだけで現地に行った気分になります。コロナ禍で思うように遠出ができない今、読んで旅気分を味わうのも一興です。

ちなみに「城の壁にたくさん空いている三角や丸の穴」は、「狭間(さま)」と呼ばれる防御用の穴のことです。「日本でいちばん強いお城」はどこでしょう……? ぜひ本書でご確認ください!

『50代からの疲れをためない小さな習慣』

岸本 葉子/著(佼成出版社)

人とは日々老いていくものです。気持ちは若くても体がついていかず、記憶力の方もあやふやな状態に。こういう時は人生の先輩に意見を訊くのも一つの手。友だちや職場の人も良いですが、エッセイを読むというのはいかがでしょう？

岸本葉子さんといえば日常のささやかな出来事を、非常にユーモラスに書かれます。「あるある」という共感を引き出すのがとてもお上手。決して悲観的になることなく、もし自分が50代半ばになったら……を感じる事が出来ます。勿論、ご年配の方が「この頃はこんなだった」と懐かしむこともできますし、同年代であれば現在の自分と比較して楽しむことも出来るかと思えます。また男性であれば、身近な女性の気持ちを知る良き手助けとなることでしょう。

『ルリユールおじさん』

いせ ひでこ/作(講談社)

ある日、ソフィーが大事にしていた図鑑のページが外れ、バラバラになってしまう。こわれた本を両手で抱え、なおす方法はないかと探している彼女に「そんなにだいじな本なら、ルリユールのところに行ってください」とすすめる市場の人。パリの街の路地裏の小さな窓。その中でルリユールは、ひとつひとつ手作業で本を修復していた……

こわれた本を買い直すのは簡単なことかもしれない。けれど、何度も何度も自分でページをめくり、読み返してきた大事な本だからこそ、修復することで、もっと特別な本になる。

図書館の本も、たくさんの人に何度も読まれ、ページが外れたものや、端が破れてしまったものがある。そんな本を修理するとき、これからもたくさん読まれますように、という気持ちを込めて修理している。物を大事にしている人にも、ぜひ読んでもらいたい。

『へんな科学』

五十嵐 杏南/著(総合法令出版)

テレビも新聞も暗いニュースばかりの中、不安に対する笑いの効能は高いように感じる。日本人がなんと14年も連続して受賞している賞、イグノーベル賞をご存知だろうか。裏ノーベル賞とも呼ばれるこの賞は1991年に創設されている。人々を笑わせ、そして考えさせた研究に与えられる。あの「バウリンガル」や「カラオケ」も受賞していると聞けば親しみが湧くだろうか。本書で紹介されている研究は目次を読むだけでも興味をそそられ、口角が上がるのを感じる。「ニシンはオナラで会話する」「ジェットコースターで尿路結石が通る」など、一見眉唾ものに聞こえるが、れっきとした研究ばかりである。笑った後、何を考えるだろうか。笑いをも届けてくれる科学者に最大の賛辞を。

『七都市物語』

田中 芳樹/著(早川書房)

名の知れた作家の作品でもメジャー作品とマイナー作品がある、と思う。田中芳樹氏の作品では『銀河英雄伝説』や『アルスラーン戦記』といった超の付くメジャー作品があるので、多くの方はそちらを手にするだろう。だが如何せん『銀英伝』も『アルスラーン』も長い。他のシリーズを選ぼうにもたくさんあって選びきれないうえ、遅筆で有名な氏の作品には第一巻の刊行から15年以上経った今でも未完のシリーズがある、という罫もある。そんな作品群から、田中芳樹初心者にお薦めするのが『七都市物語』である。未曾有の天変地異が起こった地球で、勃興した七都市が興亡を繰り広げる、というストーリーだ。連作短編もので、何より1冊で完結しているので安心だ。

難点を挙げるなら、この本を読んだという既読者にあまり遭遇しないことと、もし既読者に巡り合ってもそれは恐らく本気のファンなので、語り出して長時間拘束される恐れがあることである。注意されたし。

『性風俗シングルマザー』

坂爪 真吾/著(集英社)

自分の身の回りにない事・体験した事がない事・知らない事。それは意図的に目をつぶっていることもあるだろうし、全く興味のないことでもあるだろう。しかし実際に現実には起きている事を知らないがゆえに、気づかぬ間に人を傷つける行動をおこしたり、差別的な思想を知らぬ間に抱いていたりすることもある。日本ではシングルマザーや性風俗に対する風当たりはととても強いように見受けられる。しかし本当にその実態を知ったうえで批判をしているのだろうか。

この本は様々な性風俗で働くシングルマザーのそこに至るまでの体験や今現在の状況、彼女たちの思いが書かれている。その中には色々な考え方があって、同じ女性として共感したりイライラを生んだり何故と疑問に思ってしまったたりする。読後が良い本とは決して言えないが、これは秘すべきことではないと理解を深めるために手に取って欲しい。

『ルイス・キャロル』

ルイス・キャロル/撮影 渡辺 滋人/訳(創元社)

ルイス・キャロルという名前を聞いた時、まず思い浮かべるのは「不思議の国のアリス」の作者であろうかと思えます。それに加えて、数学者だったという方がいれば、ルイス・キャロルに詳しいのかな?というところでしょうか。本書は文学者でも数学者でもなく、写真家ルイス・キャロルに焦点をあてた本です。

日本で言えば、江戸時代末期から明治の初めの頃、彼は自身のスタジオで写真を撮影し、写真を現像していました。写真のモデルは普段着で撮ったものもあれば、今でいうコスプレのように日常から離れた衣装をまとい、ポーズを決めたものもあります。この本に紹介されている写真はどれも親族や友人の姿の記録というよりは、一つ一つが様々な工夫をこらし、時間をかけて撮影された芸術品のように思えます。写真家ルイス・キャロルの魅力をぜひ味わってみてください。

『オルゴオル』

朱川 湊人/著(講談社)

子どもが成長していくときに自分で経験し、学んでいることは必ず生きていく力になる。この作品は成人書ですが、中学生や高校生にもよんでほしい作品です。作家はホラー系の作品のイメージもある方なのですが、今回は少し違ったものです。

少年の父親は正直者であるが世間的には負け組で家族は離婚。母親とは距離を置きヒトミさんと名前で呼び暮らしています。知人から預かったものを届ける約束をした少年は一人で旅に出ます。父親との再会や、旅の途中で出会う人たちに影響を受けながら、過去にあった悲しい事故や震災、戦争の事などを知り、その場所を訪れていくうちに少年の価値観が変わり始めていくところが読みごたえがあります。

「去るもの、日々にうとし」？ そんなことはない、届けた「オルゴオル」は鳴りませんでした。少年にも耳を澄ませば心の音が聴こえました。時が経っても忘れることなど出来ない事がある、作者からのメッセージだと思いました。

『めんたいこ どリーむ』

はしもと えつよ/作(講談社)

「明太子」は、言わずと知れた福岡の名産品。真っ赤な姿にぴりりと辛いあの味を思い出すとご飯が恋しくなる。これは、そんな明太子である「めんたいこたろう」が「しろめしやま」のてっぺんに登ることを夢見て奮闘する絵本だ。山に登るなんて簡単そうだが、これがなかなか難しい。そもそも明太子は、柔らかいので登るのには不向きな体。しかし、こたろうは諦めない。仲間と体を鍛えはじめるのだ。はたしてこたろうは、悲願を達成することができるのか？

ライバルの「たくあんブラザーズ」や迫力満点の「うめぼし」を見て美味しそう……と、呑気に読み進めていたが、その健気な姿についつい応援したくなる。また、作者の「はしもとえつよ」さんは、北九州市で活躍されている作家で、当館のマスコットキャラクター「はたるー」の生みの親でもある。「地元の作家」による「名産品」を主人公とした郷土愛の詰まった作品をぜひ、手に取ってほしい。

『やっぱり犬がほしい』

スギヤマカナヨ/著(アリス館)

犬がほしい「ぼく」は、おとうさんに犬をかう大変さをおしえられる。毎日散歩できるかい？ お金もかかるよ。旅行にもかたんにいけなくなる。いたずらもするし、びょうきにもなる。そして、なにより大変なのは、ひとつの命をさいごまで責任をもって守ること……

新型コロナウイルスの影響で家にいる時間が長くなり、ペットを飼う人が増えているそうです。でも、なかにはきちんと面倒をみられず結局手放してしまう人もいるとか……そのニュースを聞いたときに思い出した本がこの『やっぱり犬が欲しい』。犬に限らず、動物を飼う大変さと責任を、やさしい言葉で教えてください。

『なぜ元公務員はおにぎり35個を万引きしたのか』

北尾トロ/著(プレジデント社)

「そんな事件を起こすような人ではない」。普通のビジネスマンがある日突然犯罪者になる。本書では、19年間裁判傍聴を続けてきた著者のビジネスマンのみに焦点を当てた傍聴記が19本書かれている。平凡なビジネスマンがなぜ犯罪に手を染めてしまったのかが数ページで端的に綴られている。後半には長年裁判を傍聴してきた著者だからこその目線で裁判傍聴から学ぶビジネスマン処世術が記されている。既知のものが多いながらも裁判のシーンで見るとひとつひとつが深く入り込んでくる。加害者・裁判という言葉は遠いものとして考えていた。しかし、本書を読むと誰しもが犯罪者になりうると思わせられる。真面目な人ほど陥りやすい負のループに陥らないよう、セルフコントロールを身に着けたいと思う。

『ビニール傘』

岸 政彦/著(新潮社)

都会の片隅で生きる若い男女の物語。決して幸せとは言えない日々を送っている若者の日常をリアルに描いている。文章中語り手が突如変わり混乱してしまうところもあるが読み進めると人や場所が少しずつクロスしていることに気づく。

登場人物は、派遣社員や日雇い労働者、リストラ、貧困とみな不安感を抱えていて日本社会の歪みが見えてくるようだ。著者が社会学者ということもあるのかどこかノンフィクション作品を読んでいるような気にさえなる。また、挿絵のモノクロ写真がより一層想像をリアルにする。この作品を読んで、仮に人生の幸せ度や成功度があって明と暗で表せられるのならば都会であればあるほど明から暗までのグラデーションは細かく分かれ明度差は大きなものになっているのではと感じた。この作品はいわゆる「感動もの」というより寂しさや悲しみ、むなしさ、やるせなさが残る作品だが、それだけに何か考えさせられるものがある。

『久留島武彦評伝 日本のアンデルセンと呼ばれた男』

金成妍/著(求龍堂)

この本は、明治から昭和にかけて「信じあうこと」「助け合うこと」「違いを認め合うこと」など、人が人として共に生きていく上で必要な教えを、楽しいお話にのせて子どもたちに語り聞かせた久留島武彦の評伝です。武彦の夢は、中学の時アメリカからやってきた英語教師、ウェンライト氏に出会うことで決まります。それは児童教育、子どものための文化事業を起こすこと。口演童話会や日本初の児童劇団の設立、幼稚園の開園やボーイスカウトの創立など沢山の事業に携わります。また、デンマークでアンデルセンの過小評価を目にし、アンデルセンの復権を呼びかけます。デンマークでは博物館が建設され、日本で初めてアンデルセン記念祭を開催し、デンマーク国王から文化勲章を受章しました。著名人の名前もたくさん出てきて、いろいろな人との関係性も見えてきて楽しいです。彼の童話を読むと、心が温かくなります。この本を読んで、その気持ちがあったように感じます。

『ヒックとドラゴン』

クレシッダ・コーウェル/作
相良 倫子・陶浪 亜希/訳(小峰書店)

ヒックはバイキングの少年です。父親は島のみんなをまとめるリーダ。母親は亡くなっていません。バイキングの男たちは逞しくて勇気があるのが当たり前。だけどヒックは細くて力も自信もない男の子です。そのせいで父親とも関係が悪いです。ある日ヒックは怪我をして飛べなくなったドラゴンのトゥースと出会います。ドラゴンを殺して父に見せれば自分を認めてもらえると最初は思いますが、優しい心ではそれは出来ませんでした。野生のドラゴンとの友情を少しずつ深めていく様子はとても可愛らしいです。この物語には他にもいろいろな種類のドラゴンが登場してユーモラスに描かれています。別の野生のドラゴンの群れと戦うことになりませんが、この戦いに貢献したヒックは島の人々に認められ、父親との関係も良くなります。自信のなかったヒックの気持ちの移り変わりや、親子の愛情に感動しました。

『感謝離』

河崎 啓一/著 (双葉社)

55年連れ添った最愛の妻が突然の病に侵されます。共に有料老人ホームへの入居を決意しますが、様々な制約がある集団生活。その中でも妻の笑顔が見たいと知恵を絞り、ドライブや旅行に連れ出したり、歌を歌ったりと次第に衰えていく妻に寄り添う筆者。

そして7年後に訪れた別れの後、妻の遺品と向き合います。遺された品には妻のぬくもりや思い出、魂が残っています。そのひとつひとつに感謝しながらの処分、「感謝離」をしていきます。苦痛や寂しさが上回ったら無理をすることはない。自分の心が納得したときに感謝離する。モノとは別れても、パートナーとはずっと一緒。朝日新聞「男のひといき」欄の投稿が注目され、SNSなどで拡散。感動の輪は今も広がり続けています。

『ヴァン・ゴッホ・カフェ』

シンシア・ライラント/作 中村 妙子/訳(偕成社)

カンザス州のとある町にあるヴァン・ゴッホ・カフェ。むかし劇場のかたすみにあったころからずっと、このカフェの壁には魔法がしみこんでいます。そして、ときたま魔法はひとりでに目をさまし、いろいろなものに影響を与えるのです。

突然姿をあらわしたオポッサム、カフェをゆるがすほどのいなびかり、うつくしい女のお客さんがくれたマフィン、かつて一世を風靡したもとスター、猫のエメラルドとカモメ、夢をあきらめかけている作家志望の男——こうしたひとびとや動物、いろいろなものに起こった魔法はとても不思議で、しみじみとした優しさに満ちあふれています。そして、その魔法は町ぜんたいに広がって、ささやかな、でもその人にとってはとても大きな意味をもつ奇跡が起こり始めます……………

100ページ足らずの本でジャンルとしては児童書ですが、大人の方にもぜひ読んでいただきたい心温まる物語です。

『風と共にゆとりぬ』

朝井 リョウ/著(文藝春秋)

ゆとり世代と聞くと、皆さんはどのような印象をお持ちですか？ コミュニケーション能力が低い、指示待ち、すぐ仕事を辞める、などなど……あまり良い印象はないかもしれません。そんなマイナスイメージ満載の言葉をあえて題名に入れた本、『風と共にゆとりぬ』をご紹介します。著者は、こちらもゆとり世代で直木賞作家の朝井リョウ氏。著者が遭遇した日常のエピソードから、痔を発症したことからはじまる闘病記まで、300ページ越えの超大作エッセイです。

この本を読んだからといって、特にためになることはありません。ただひたすら笑えるだけです。とはいえ、ゆとり世代の方、ゆとり世代が分からないと悩んでいる方、読書が苦手な方、読みたい本は全部読んだので次に何を読んでいいか分からない方、暇でやることがない方など、とにかくいろんな方に読んでいただきたい1冊です。

『ホントに食べる?世界をすくう虫のすべて』

内山 昭一/監修(文研出版)

あなたは虫を食べたことがありますか?

今、世界の食糧難を救う食材として注目されている「虫」。虫と聞いただけで、ゾッとする人もいるかもしれませんが。しかし、人類は古代から虫を食べていた記録があり、現在でも20億人が約1900種類の虫を食べているのです。この本では、虫ごはんの世界を、昆虫料理研究家が写真とイラストを使って、面白く、かつ、わかりやすく紹介しています。

一番おいしい虫はセミ。日本の虫グルメ王国は長野県。将来、虫ごはんが給食になるかも? バッタの天ぷら、こおろぎカレーの作り方など…… 最初は怖いもの見たさで手に取った人も、読み進めるうちに「へえ～」と感心し始め、ページをめくる手が止まらなくなるはず。虫が好きな人も、虫なんか絶対に食べないと決めている人も、まずは知ることから始めてみましょう。

『みどりいろのたね』

たかどの ほうこ/作・太田 大八/絵(福音館書店)

小さい頃、祖父母の家で出されたすいかに思い切りかぶりつき、その後種をこっそり庭に埋めた経験がある子どもは多いのではないかと思う。さくらんぼの種でも同様。もしかしたら同じように大きく育ててまた食べられるのではないか、と夏空の景色と共に夢見た気持ちは鮮明に脳裏に焼き付いている。

この本に登場するのは「みどりいろのたね」だ。一見見た目は同じの、「みどりいろのたね」。まあちゃんに気まぐれに植えられた「みどりいろのたね」は他の同じ「みどりいろのたね」と互いの違いを乗り越えて共に育っていく。「ね」も「め」も出ないのに。

堂々と振る舞い、誇らしげな表情の「みどりいろのたね」に思わず吹き出してしまいそうになる。子ども心を忘れてしまった大人に、価値観に縛られ凝り固まってしまった大人に、是非読んで欲しい、たかどのほうこの名作。

『惚れるマナー』

大下 一真/著 ほか(中央公論新社)

読売新聞火曜日夕刊の「たしなみ」欄に掲載されたものを収録したエッセイ集。これまでに「考えるマナー」「楽しみマナー(マナーの正体)改題」と出版され、今回が第三弾。今までも多岐にわたる方々が日常のちょっとした事へのたしなみマナーについて書いている。今回は柴崎友香さんが普及したネット通販ならではの評価コメントに対するマナーや30年前に渡米したお笑い芸人・野沢直子さんがアメリカのスーパーマーケットで見た支払いを待つ間のアメリカ人の習慣など日本では考えられないことが紹介されていて国が変わればマナーも変わるのだと驚きながらも笑える。他に音楽プロデューサー松任谷正隆さん、科学者の松井孝典さんほか7名の多彩に富んだ著者たちの物事の捉え方や考え方日常生活が垣間見られる。

『かがみの孤城』

辻村 深月/著(ポプラ社)

2018年「本屋大賞」を受賞した小説です。以前、初めて辻村氏の「ツナグ」を読んで感銘したので手にしてみました。物語は主人公(こころ)の部屋の鏡が光りはじめ、その中を潜り抜け別の世界のお城に入っていくことから始まります。そこには(こころ)と似たような境遇の七人が集められ、どんな願いでも叶えてくれるという鍵を探しながら、お互いに絆を深めていく。そしてお互いの事が徐々に分かり始めるが……

最初はいじめ問題に焦点をあてた小説かと思いきや、どんどん引き込まれていくファンタジックストーリー。特に学生さんや先生方には是非とも読んで頂きたい1冊です。

『戦場の秘密図書館』

マイク・トムソン/著 小国 綾子/編訳(文溪堂)

2011年3月、シリア全土でアサド政権に対する抗議デモが広がる。政権側はデモ参加者を武力で一方的に弾圧しようとし、シリア内戦が始まった。アサド派勢力に包囲されて以来、外部から食べ物も薬も、なにもかも受け取れない絶望的な状況…… しかし、そんな中、人々の明日への希望を繋いだのが、地下の秘密図書館だった。

本書は、シリア内戦下、ダラヤの町に存在した、秘密の地下図書館を守り続けた若者たちのノンフィクションである。地下図書館に置く本を集めるために、爆撃の包囲網をくぐりぬけ、本の救出に奔走し、また、少しでも多くの人々の学びの場となるために、図書館で講座を開く若者たちの姿に、胸が熱くなった。

今、図書館という場所の重要性が問われている。彼らが守った図書館は、私たちがいる図書館と同じ機能をもっていた。知識を得ることのできる場所がある、その事実を今噛み締めて、これからの未来をどのように生きていくか考えたい。

『くらべる日本 東西南北』

おかべ たかし/文 山出 高士/写真(東京書籍)

ライター・おかべたかしと写真家・山出高士による、「目で見ることばシリーズ」。「くらべる東西」や「くらべる値段」に続く、くらべる編の本書は東西南北版である。この手の類書は数多くあり、単なる地域特性の比較本と言ってしまうそうになるが、本書はレイアウトの見やすさが特徴的である。東西版でも見られた、二つの比較対象をだいたいの東西に分け、右ページには東側の紹介、左ページには西側の紹介という方式が今回も採用されている。そのため、いつのまにか左ページを先に見るようにページをめくってしまう。左右を比較し、自分がどちらに該当するのか、一喜一憂するのも楽しい。また、食べ物や犬の違いにそこまで驚きはないが、表紙にある「スコップ」や「止まれ」の違いなど衝撃が走るものもある。育ってきた環境が違うから～とかつての国民的アイドルは歌ったが、いつも違いを認め、楽しめる人間でいたいものだ。

『おしゃ修行』

辛酸 なめ子/著(双葉社)

漫画家でコラムニストの辛酸なめ子さんの作品。斜めから世の中を見ているような切り口がいつも面白い作家。今回の「おしゃ修行」、こなれ感や抜け感がと言った雑誌に出てくるようなワードが身につきファッションの参考になるようなことはほぼありません。しかし、おしゃれタウンの視察やモテ服と萎え服を考査する等々斜めからのおしゃれ修行が書かれています。ファッションの参考ではないですが、そうだよなと思うことも書いています。例えばハイブランドはお守りの要素あり、三足1000円の靴下ばかり買っていると3足1000円の現実しか引き寄せないなど、安くても良品はあるしかしちょっと高くても良いものは心に余裕を持たせてくれるのかもしれないと。ファッションに興味ないし自信なしと思っている人に笑って読んで頂きたいエッセイです。

『葉室麟 洛中洛外をゆく。』

葉室 麟 洛中洛外編集部/著 (ベストセラーズ)

小説の舞台となった地を訪れる案内本は数多くありますが、この本は著者が自著の3つの小説に所縁のある地を訪れ、小説に登場する人物や作品、そして自身の人生論について語っています。

書名に「洛中洛外をゆく」とあるように、この本では京都のいろんな場所を訪れています。観光地として有名な寺院も多く紹介されているので、「ここは行ったことがある」という方もいらっしゃるかもしれません。しかし、この本を読み、葉室麟氏の作品を読んだ上で訪れてみると、また違った見方、楽しみ方ができるのではないかと思えてきます。葉室麟氏のファンの方はもちろん、京都好き、時代小説好きな方にもおすすめの1冊です。

『タンタ タンタ タンゴはパパふたり』

ジャスティン・リチャード他/作 尾辻 かな子他/訳
(ポット出版)

セントラルパーク動物園にいるくちばしの下に黒い線がある2匹のアゴヒモペンギン(ロイとシロ)のお話です。どちらも男の子ですが、とても仲良くいつも一緒でした。この子達は愛し合っていたのです。他のペンギン(ペンギン)の仲間たちが卵を温めて赤ちゃんペンギンが生まれているのを見て、彼たちは卵に似た石を見つけ、それを何日も交代で温め続けたのです……それを見ていた飼育員が他のペンギンが放置した卵を彼らの巣へ移しました。その後、彼たちは毎日温め続け、赤ちゃんが誕生し、タンゴと名前がつけられパパが二匹いるペンギンになりました。動物園の他の家族と同じように仲良く暮らしているという、全て実話のお話です。読み終わってとても心安らぎ、幸せな気持ちになりました。

『おかあさんとあたし。1&2』

ムラマツ エリコ・なかがわ みどり/著(大和書房)

こどもはかわいいですか？ おかあさんは好きですか？ 「はい!」と答える人は何%だろうか。本書は二人のユニットによって、どこにでもありそうなおかあさんとあたしの日常のひとコマひとコマが絵とちょっとした文で描かれている。

自分が親として出会ったものもあれば、こどもの頃を思い出すものもある。誰もが経験したことがあるようなひとコマだが本書で見ることによって客観視することが出来る。自分が言われてうるさかったあの言葉も今読んでみるとありがたいと思えるかもしれない。

今の親子関係がどうであれ、こどもの頃おかあさんという存在がどれほど大きかったかを思い知らされる。おかあさんが好きな人もあまり好きではない人もパラパラと眺めてみてほしい。

『ギャンブル依存国家・日本』

帚木 蓬生/著(光文社)

緊急事態宣言を受け不要不急の外出は控えるようにとされているのに、パチンコ・パチスロ店の開店に行列する人々。テレビで見ている異様に感じてしまった人は多いのではないだろうか。この行列に並ぶ人たちを見て「ギャンブル依存」という言葉が思い浮かぶ。

依存症には色々な種類があり、精神科医でもある著書は「ギャンブル障害」と分類している。症例としてギャンブルのせいで多大なる借金を背負った人、家族から見放された人、殺人をしてしまった人等多く挙げられているのだが、この思考回路が中々理解できない。ギャンブルにはまっている人はもう脳から出る物質で変化が起こってしまっており、正常な思考に結びつかないのだそうだ。ではどうしたらこの依存から立ち直ることができ、どうやってその気持ちを理解したらいいのか。とても興味深い1冊である。

『ツナグ』

辻村 深月/著(新潮社)

不思議な力が受け継がれている家系の男子高校生・歩美とその祖母が、依頼人に一度だけ死者と会わせるお話しの連作短編集です。憧れのアイドル・病気の告知に悩んだ母・自分が殺したかもしれない親友・失踪した婚約者。会いたい 死者も理由もバラバラです。依頼人はそれぞれ事情があって死者との数時間を過ごしますが、楽しい事ばかりでなく切なかったり悲しかったりの思いがあり、泣けてきます。たった数時間一度きりのことだから、優しさや愛おしさや憎しみや嫉妬という本心をさらけ出す描写は、とても人間くさく生々しいです。そしてこの不思議な力の継承を巡っても、歩美の両親の悲惨な死が絡んでいてミステリアスでもあり、また遣る瀬無い展開となっていくます。群像劇的な人々のオムニバス小説の中にファンタジー要素が盛り込まれた形態は、著者の得意技。ベストセラーで、映画化もされた本書をじっくりと味わっていただきたいと思います。

『クラシック名曲全史—ビジネスに効く世界の教養』

松田 亜有子/著(ダイヤモンド社)

数百年の時を超えて、世界中で愛され続けているクラシック音楽。音楽は「聴衆」と「演奏者」がいて初めて形になるものです。どんなに作曲家が想いを込めた曲でも、演奏する人がその曲に惹かれなければ演奏されませんし、観客が「聴きたい」と感じなければ再演されることもありません。クラシックの世界もビジネスの世界同様、非常に厳しい世界です。そして今も聴き継がれ、残っている作品には生命力が宿っています。そのクラシックの歴史を知ること、その時代の政治や経済の流れを体感することができます。クラシック音楽のプロデュースも手がけ、音楽を通じて様々な出会いの場を届けている著者が年代別に作曲者を取り上げ、時代背景とともにビジネス的な視線でとらえ直した本書では、音楽の背景にある物語をも楽しんでいただけます。また、本書には登場する名曲を試聴できるQRコードがついていて、実際に曲を聴きながら読書を楽しんでいただくこともできます。

『わたくしたちの成就』

茨木 のり子/著(童話屋)

自分が反抗期を終えた瞬間を覚えている。高校の授業中、茨木のり子の「自分の感受性くらい」に頬をひっぱたかれ、あっけなく終わりを迎えた。詩人茨木のり子といえば「わたしが一番きれいだったとき」「寄りかからず」と、その凜とした雰囲気思わず背筋が伸びる作品が目立つ。しかし、本書は、先立たれた最愛の夫への想いを詠んだもので、そのまま帰らぬ人となった入院前夜「最後の晚餐」や遺品の椅子との思い出「椅子」など夫への思慕やどうしようもない寂寥感と今までにない彼女の姿を見ることが出来る。「いつもの日常」が急に姿を消すという稀有な体験をした現代日本において、どこか通ずる想いをもつ方がいるのではないだろうか。

『砂糖の通った道 菓子から見た社会史』

八百 啓介/著(弦書房)

現代では簡単に買える砂糖も、江戸時代はとても貴重な輸入品でした。長崎街道は外国より輸入された砂糖を運ぶ主要ルートの一つであり、街道沿いの町々の菓子文化にも多大な影響を与えたことから、後に「シュガーロード」と呼ばれるようになりました。この本では砂糖の日本における歴史から、長崎・佐賀・福岡の菓子文化との関係、そして近代になって生まれたその土地の銘菓の由来などがわかりやすくまとめられています。

千鳥饅頭や八幡饅頭といった馴染み深い銘菓のルーツや、現代まで残る大手菓子メーカーの創業にまつわる話など、読み応えのあるエピソードが盛り沢山の1冊です。

『美しいものを見に行くツアーひとり参加』

益田 ミリ/著(幻冬舎)

1969年大阪府生まれ。優しいイラストと、何気ない日常のエッセイが人気を博している著者は、無類の旅好き。著者が、実際に旅をして出会った人々、おいしい食べ物についてまとめた本も多く執筆している。今回は、海外の「美しいものを見に行く」がテーマの旅エッセイである。当時、40歳になった著者は急き立てられるように、世界の美しいものを見たい衝動に駆られる。実行に移すか迷っていた時に 著者の背中を押したのが、添乗員同行のツアー旅行。オーロラを見に行くツアーを皮切りに、リオのカーニバルなど本書の中で5か国を巡っている。自由気ままに街を歩いて、地元っ子気分を味わい、他のツアー参加者とささやかな交流を楽しむ姿に、すぐにでも旅に出たい気持ちにさせられる。さて、5つの旅を終えた著者が1番印象に残っている美しさとは……その答えは、ぜひ本書で確認してもらいたい。

『平安女子の楽しい!生活』

川村 裕子/著(岩波書店)

「千年前にタイムマシーンで行ったらどんなことになるかな」あとかきの最初に記載されているこの言葉。千年前は平安時代で、日記文学を研究されている川村裕子さんは、この時代の女子たちの暮らしや姿を色々な作品を見ながら再現したいな、と思いこの本を書きました。平安時代というと学校の授業でも取り上げられることが多いので、どこかで耳にしたことはあるでしょう。ただ、年号として覚えてはいるけれど、その時代の人たちがどんな家に住んで毎日どんなことをして過ごしていたかまで知っている人はそんなにいないのかもしれない。この本は平安時代の男女の生活からファッション、恋バナなどが書かれています。平安時代の女性は今のようによく自由に外に出ることは出来ず、辛い日々を過ごしていたのかと思いきや、夢や憧れを持って喜んだり悲しんだりしながら一生懸命自分たちの人生を生きている姿が描かれています。

『鉄のしぶきがはねる』

まはら 三桃/著(講談社)

青春という言葉の威力を、久し振りに感じた1冊だった。主人公の心(しん)は、北九州市内の工業高校に通う16歳。クラス唯一の女子ながら隣の席の男子がパンツ一丁でも泰然としている、クールな女の子である。そんな彼女が部活動や新たな出会いを経てもものづくりコンクールを目指す、という物語だ。特に大きな事件は起こらない。誰も殺されないし、魔法もアクションもないが、心にとってはこれが「青春」であり、大半の大人たちもこんな十代を過ごしたはずだ。残念ながら忘れ去ってしまっているだけで。

児童書に分類されることもある青春小説だが、同時に、北九州出身の著者による鉄の都を舞台とした郷土小説でもある。「激しいほどに強い鋼の気配」に魅せられた心の青春を、懐かしさとともに味わってみて欲しい。

この本は、八幡図書館作成の冊子『郷土資料案内』でも取り上げている。ご興味を持たれた方は、そちらもぜひ併せてご覧いただきたい。

『戦争とおはぎとグリーンピース 婦人の新聞投稿欄「紅皿」集』

西日本新聞社/編(西日本新聞社)

1954年～63年にかけて、西日本新聞の女性投稿欄「紅皿」に掲載された投稿の中から、戦争をテーマとした42編を収録した本です。戦争や戦後を生きた女性たちの等身大の姿が綴られています。文章中に登場する戦争に関連する言葉は巻末に解説もついていて読みやすいです。戦争の残した悲しい爪痕は何年経っても消えないものだというのを、日々の何気ない投稿から窺い知ることができます。それぞれは短い文章ですが、どれも戦争を二度と起こしてはいけないという平和への強い思いや、家族への愛情に溢れています。戦後70数年を経て、当時の記憶が忘れ去られようとしている今だからこそ読みたい、女性たちの閉じ込めてきた本音が真に迫る貴重な記録集です。

『わたしのそばでできいていて』

リサ・パップ/作 菊田 まりこ/訳 (WAVE出版)

☑人前だと、緊張してうまく話せない。

☑人前だと、うまく読めない。

☑国語の授業が嫌いだ。

☑そもそも字を読むことが好きではない。

1つでもチェックがついた方は、「わかる!!」と強く共感できる作品です。

読むことが苦手なマディは図書館で出会った犬のボニーに本を読んであげることになります。音読の練習を通じたボニーとの関係性、マディの成長に、読後優しい気持ちになると共に、教育の在り方について改めて考えさせられます。ボニーのような犬は専門的な訓練を受けたセラピードッグとして知られ、人々に安らぎや癒しを与えてくれる存在です。日本の図書館でもセラピードッグを招いての読み聞かせイベントの開催など、接する環境が少しずつ展開されています。お子さんから大人の方まで、多くの方に手に取っていただきたい作品です。

『世界の美しい書店 WE LOVE BOOKSTORE』

今井 栄一 /著(宝島社)

私の見ていて楽しい風景の一つ、それは沢山の本が並んでいる様子です。書店や図書館のように沢山の本が並んでいるのを見ると、わくわくします。何が書かれているのか、綺麗な写真はあるのかと頁をパラパラと開いて、自分のお気に入りの本を探す時間はとても楽しいひとときです。実際に目でみなくても、写真を通して本が沢山並んでいる様子は見ていてもあきません。そしてこの本では世界の美しい書店を写真とともに、その書店の歴史や街の様子、作者の旅で培われた知識が書かれており、読んでいるとその書店に愛着が湧いてきます。乾燥して暑く雨のあまり降らない土地ならではの屋外書店には、本は焼けないのだろうかと心配になったり、かつて劇場や教会の建物を利用した書店には、建築の美しさと本棚の調和にうっとりしたり。それぞれの本屋ならではの魅力が書かれていて、書店や図書館好き、はたまた、私のように本が並んでいる様子が大好きな人にお薦めの1冊です。

『中をそうぞうしてみよ』

雅彦＋ユーフラテス/作(福音館書店)

出題：身の周りにあるもの、その「中」をそうぞうしてみよ！

本書には椅子や針山、包丁などの写真が登場する。その「中」をそうぞうするとは？

著者はNHK教育テレビ「ピタゴラスイッチ」監修でおなじみ、佐藤雅彦氏とその研究室からなるクリエイティブグループ、ユーフラテス。

『考え方の整頓』や『プチ哲学』でも見られた、佐藤氏の物事の対する考え方に一石を投じるテイストは本書でも発揮されている。

エックス線で透けて見える対象の「中」の写真に、大人が読むとあまり驚きはないが、子どもにとっては新鮮に映るだろう。中はどうなっているのだろうと想像する心は、探求心や洞察力などが育ち、心を豊かにしてくれる。是非大人と一緒にああじゃないかこうじゃないかとワイワイおしゃべりしながら読んでほしい科学絵本。普段おはなし絵本しか読まない子どもにもお薦めしたい。

『レッツゴー!ばーさん!』

平 安寿子/著(筑摩書房)

普通の人々の日常を独特のユーモアを交えて描いた作品を多く手掛ける平安寿子の作品。この作品も「老い」をテーマにこれまたユーモアたっぷりに描いている。

主人公、東西文子60歳は素敵なばーさんを目指し日々精進している。白髪薄毛問題、老眼問題、歯問題、物忘れ問題、ケガしやすい問題そして老親問題と若い頃気にも留めなかったことが続出するが、自分に合った方法で淡々と解決納得していく文子。

老いることは嫌なことばかりではない、楽しく老いることが素敵なばーさんへとなる秘訣なのである。「金持ちだろうが貧乏人だろうが老いは平等」など沢山の文子語録も読んでいて心地よく楽しい。本書は、30代以上のまだ楽しく老いることを知らない大人の女性に向けたばーさん取り扱い説明書といったところである。